Area 888

apple

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｒｅａ　８８８

【Ｎコード】
Ｎ５２３４Ｉ

【作者名】
ａｐｐｌｅ

【あらすじ】
宇宙基地エリア８８８、そこでは一癖も二癖もある男たちが日夜戦い続ける・・・。

Ａｒｅａ　８８８（前書き）

この小説の９９．８９％はパロディーです。むしろパロディーでない所を探す方が大変です。そのため、分からない人には意味不明で、分かる人だけがそんな自分にニヤッとできるかもしれません。ですので、タイトルに感じるものが無かった人は、他の小説を読むことを推奨します。

Area 888

１５年前、戦争が終わった。

たった一発の銃弾から始まった戦争がまさか百年も続くとは、誰も予想しなかった。

遥か昔、冷戦と呼ばれていた時代に、二つの大国が宇宙開発を競ったように、多かれ少なかれ戦争は技術の進歩を促す。

人工知能、遠隔操作、戦場から人の姿は消え、ロボットと無線操縦戦闘機だけが戦い「死んでゆく」。

生産されては壊される。戦局は果てしない消耗戦の様相を見せていた。

多くの「兵士」にとって「敵を破壊する」ことが最重要任務であった。しかし、「壊されないこと」旗艦クラスの戦艦や空母ではこれが最重要命令であった。

彼らの優れたＣＰＵとアルゴリズムはたびたびある「解答」を導きだした。

「人間がいなくなれば、自分たちが戦う必要はなく、互いに壊し合うことはない。」軍事兵器である彼らにロボット三原則など何の関係もなかった。

当然、彼らが味方の人間に攻撃することは禁止されている。しかし、敵側の人間なら・・・。

司令官クラスの権限を持ったコンピューター同士が連絡を取り合う。完全に自動化された化学工場に、弾薬の補充という名目で毒ガ

スが発注される。

人間も何もしていない訳ではなかった。専門家の中にはロボット兵の反乱を指摘する者がいたし、たとえ兵器といえどもロボット三原則は必要であると主張する人々もいた。

だが、ロボット兵がだめなら誰が戦うのか？人間相手には誰が戦うのか？また人と人が血を流し合うのか？彼らは大衆の疑問に答えることはできず、沈黙していった。

「その日」は来た。突如空から落ちてきたミサイルと毒ガスにより、人々は何が起きたのか知る間もなく死んでいった。

だが、すべての人が死んだ訳ではなかった。生き残ったわずかな人々は情報を集め、本国の星に送信した。

彼らからの連絡を受けた人々はロボットとの戦いに向けて準備し始める。

後に、「第一次銀河大戦」と呼ばれる百年以上に及ぶ戦いの始まりであった。

ここはエリア８８８

今日も残党軍との戦いが繰り広げられる。

基地司令室

「敵影発見！１５時の方向、まっすぐこちらへ向かっています。」

「敵の数は？」

「機影およそ３０、距離５００００００、中型の巡洋艦３隻を中心とした布陣です。」

「スクランブル、戦果報酬はいつもと同じだと伝えろ。」

格納庫

「回せー！」

「向こうからやってくるのは久しぶりだな。」

「無茶いうな！まだエンジンのメンテが済んでない！」

「敵は何機だ、３０？少ないな。ＣＡが３隻？分かった、長距離誘導のストックは在るか？」

国際銀河連盟直轄宇宙基地エリア８８８、名前は立派だが戦うのは傭兵ばかり。正規兵の大半は整備兵などである。通称「地獄の一丁目」。戦争が終わって１５年経った今でも、ロボットとの戦いが日夜繰り広げられる激戦区である。

現在、機体の大半が地上基地の攻撃に出ているなか、敵の奇襲を受けていた。

「シン、お前が攻撃に参加しなかったのはこれが目的か？」

ミッキー・サイモン、元合星国宇宙軍第７艦隊第３８攻撃隊所属。通称「火の玉（ファイヤーボール）」。２年前のシリウス紛争では勲章をもらったほどのパイロットである。

「ＳＡＭや対空砲を潰したところでミサイル代にしかならん。」

シン・カザマ、ファウンデーション出身。ここエリア８８８で一番稼いでいる男。それ以外はほとんど謎に包まれている。

「お前に合わせて留守番していて正解だったぜ。」

「それは生きて帰ってから言った方がいい。」

彼ら二人を含めても、８８８からは１０機しか出ていない。３対１、しかも３隻のＣＡ。どう考えても不利なのだが彼らに恐怖は見られない。

「こちら基地司令のサキだ。シン、対艦ミサイルを積んでいるのは君だけだ。君は巡洋艦の攻撃に専念しろ。」

「了解。」

「ほかの者は敵戦闘機の相手だ。ミッキー、シンの援護をしろ。」

「ウィルコ！お財布握りしめて待ってろよ。」

レーダーが敵影をとらえる。

「敵影確認、これより攻撃に移る。ミッキー、ここはデブリが多い、あまり吹かすなよ。」

「この程度、障害の内には入らねーよ。お前こそ落とされるなよ。」

軽口をたたきながらも操縦桿を引く腕に力が入る。適度な緊張が体を包み、感覚が研ぎ澄まされていく。

ＲＡＳ３９グリフォン。整備性に優れ、宇宙／大気圏両用のマルチロール機だ。エンジントラブルでＶＦ－１９を失ったシンの新しい機体である。

（ＶＦ－１９より少し遅いな、だが操縦性は抜群だ。）

敵の戦闘機をヘッドオンで撃墜しながら巡洋艦に向かう。

（レーダーがブレる、ミノフスキー粒子か・・・）

ミノフスキー粒子、可視光より波長の長い電磁波を散乱するこの粒子は無線操縦の時代に終わりを告げ、人工知能を搭載した兵器の開発を促進させた。この粒子がばらまかれると、しばらくの間誘導兵器や無線操縦はコントロールを失い、レーダーもほとんど聞かなくなる。

（後ろからエンジンに当てるしかないな）

対艦ミサイルを誘導モードから直進モードに切り替える。

「ミッキー聞こえるか。」

「おう、ミノフスキー粒子だな、こっちでも見えてる。」

「後ろからエンジンに打ち込む、援護を頼む。」

「ＯＫ！任せときな！」

対空砲を抜けて、一気に敵の後ろへ。反転した後、巡洋艦に近づく。

（後少し・・・、後２００・・・）

ブレイクをかませながらも一気に近づいていく。

（後８０・・・５０・・３０・・、今だ！）

ミサイルがエンジンに向かって飛んでいく。熱で溶ける前にミサイルから放たれた高エネルギー重イオン粒子が巡洋艦のエンジンに吸い込まれていく。

ズゴォォォォオ！！！！！！！！！！！！！！

宇宙空間では音は伝わらない。しかし、白い艦が激しく爆発する様は、そんな音を見る者に届けた。

残りの２隻がバランスを取ろうと移動するが、その隙にまたミサイルを撃ち込む。

（後一隻・・・）

マランの十則その３
「常に周囲をしっかり見張れ。全神経を使って警戒せよ。」

「シン！・・聞こえ・・・一機そっち・・・たぞ！」

ミノフスキー粒子で通じなかった通信が少し回復していた。

突如、アラーム音が鳴り響く。

（アラート！ロックオンされた！？ブレイク・・いや行けるか・・）

ミノフスキー粒子はだいぶ薄れ、またミサイルが効くようになっていた。シンの後ろについた敵戦闘機は攻撃のチャンスを待っている。

（よし・・いい子だ、ついて来い・・・）

「シン！何してるんだ！早く振り切れ！」

（後少し・・今だ撃て！）

シンが旋回を緩めたのを見逃さず、敵戦闘機はミサイルを発射した。青白い炎を放ちながら、ミサイルはシンのグリフォンに近づいていく。

しかし、シンが再び急旋回を行い巡洋艦のスレスレに飛び抜けると、ミサイルはついてゆけず主砲に命中した。発射準備中であった主砲は爆発し、誘爆を引き起こしつつあった。

「やるじゃねえか！シン！」

「対艦ミサイルは2つしか装備できなかったからな、うまく誘爆してくれて助かった。」

その時、誘爆により沈もうとしていた巡洋艦の下部が開き、黒い

何かがカタパルトで射出された。

「ミッキー！マンタだ！俺のグリフォンでは追いつけん、頼むぞ。」

マンタ、姿形からそう呼ばれるその兵器は「黒い無人特攻機」とも呼ばれる。その固い装甲と速い速度で相手の装甲を打ち破り、内部で自爆する。

銀河大戦初期、ルウム戦役で人類側の艦船に甚大な被害を与えてからというもの、改良を積み重ね、百年以上も使われている兵器である。

「任せとけ！」

（とは言ったものの・・・1、2、3、4、5機か・・普通に落としてたら間に合わねえな。「あれ」を使うか。）

ビックバイパーＴ１００、合星国が大戦末期開発したこの機体は主兵装にインパルスビームガンを搭載し、火力が重視された作りとなっている。

最高速度も速くバランスの取れた機体だが、値段は高く、整備にも手間がかかるシリーズとして知られている。Ｔ１００も最新のＴ３００に比べれば安いが、それでも「グリフォンの2倍はする」とはマッコイの談である。

どうしてそんな機体をミッキーが持っているのか、それはまた別のお話。

（フルコナミコマンド発動！）

この機体の最大の特徴。それは、「オプション」と呼ばれる使い捨て小型ビーム砲を射出し、一時的に攻撃力を5倍近くに高めることである。

バイパー乗りはオプションを射出するコマンドを開発者にちなんで「コナミコマンド」と呼んでおり、出すオプションの数で「モノ」「セミ」「ノーマル」「フル」などの前置詞を付けている。

（ターゲットロック！ファイヤ！）

青い光線が黒い装甲を打ち抜き、５つの閃光が光った。

「ミッキーどうだ？始末したか？」

「ああ、こっちは片付いたぜ！だけどまた赤字だなこりゃ。」

オプションはそれ一つが格安の戦闘機並みの値段がするにもかかわらず、使い捨ての消耗品である。エリア８８８に来たばかりのミッキーに取っては頭の痛い出費であった。

「生きていればいくらでも稼げる。戦闘機の方も片付いたな、周囲に敵影なし。エリア８８８、これより帰還する。」

「了解、そろそろ攻撃に行った奴らが戻ってくる。それまでに着艦せよ。」

エリア８８８基地食堂

作戦が終了し、敵の奇襲も防いだ後ということもあってか、皆リラックスしており酒に酔っている者もいる。食事を終えて部屋に戻ろうとしていたシンは基地司令のサキに呼び止められた。

「シンご苦労だったな。」

「サキか・・・別に・・・死にたくなかった、それだけさ。」

「そうだぜサキ！活躍したのはシンだけじゃない！俺だってマンタを落としたんだぜ！」

ミッキーがご機嫌な足取りで二人に近づいた。

「ミッキー、マッコイが呼んでたぞ。オプション補充の件だそうだ。」

「あー・・・、ったくたまには気持ちよく酔いたいぜ。」

一見、酔っているようだが、しっかりした足取りでミッキーは格納庫の方へ向かっていった。入れ違いに、目つきの悪い男がふらふらとした足取りで二人の方へ来た。

「おいシン！今日はＳＡＭを３機、ＭＢＴを６輌ぶち壊したぜ！これで貴様だけにでかい顔はさせねえぜ！」

「・・ジーンか・・・デニムはどうした・・」

今朝のブリーフィングの後、震えているジーンを励ますデニムの姿をシンは思い出した。

「あいつは　ＳＡＭをくらってくたばっちまったよ。運がなかったのさ。」

「・・・」

言いたいこと言ってすっきりしたのか、ジーンは酒を片手に部屋へと戻っていった。

「ゲスめ！」

「サキ、ここは８８８。生き残った者がすべてだろ。」

自分に言い聞かせるように、シンは呟いて部屋へと戻っていった。

Ａｒｅａ　８８８（後書き）

どうでしょう。分かってしまう自分にニヤッとできましたか？
続きはそのうちのせるつもりです。
誤字・脱字・文法ミスの指摘お待ちしてます。

火の玉（ファイヤーボール）　1

バイパー乗り、合星国の主力戦闘攻撃機ビックバイパーに乗る者たちに対して使われる尊称である。

合星国宇宙軍の中でも、卓越した技量を持つと認められた者だけが搭乗の機会を与えらる。その攻撃力は小型戦艦に匹敵し、バックパックを装備することで機体単独でのワープも可能であるという。

彼らの強さは合星国の強さの象徴であり、彼らもそれを強く自負していた。

大戦終結から１３年後　シリウス星系

銀河大戦が人類の存亡をかけた戦いであったのは前半の５０年ほどである。後半の５０年は人間同士の戦いが中心で、人は戦いの歴史をを止められなかった。

戦いの大義名分は千差万別である。

自由のため、民主主義のため、祖国・民族の繁栄、神が命じた・・・様々な理由で戦う兵士たち。

しかし、真の目的はいつも似たようなものであった。

植民地の獲得、資源の争奪、ライバルの排除・・・。

ここ、合星国第１３植民地シリウス星系もそんなありふれた戦場

だった・・。

植民地という名前から想像されるほど、シリウス星系はひどい有様ではなかった。合星国と同等の軍備を有する中央連邦に近いこの星系は、重要な戦略拠点であり、かなりの範囲で自治は認められていたし、人々の生活水準も悪くなかった。

宇宙軍こそ保有していなかったが、陸海空の三軍の保有は認められており、植民地としてはかなりの待遇であった。合星国本国でも、植民地からの昇格がたびたび議論されることも有るほどだった。

ところが、合星国軍の基地移設問題で植民地政府と本国との関係が悪化。軍事費の削減を進める合星国が更なる軍事的負担を植民地に求めると、植民地政府はこれを拒否。

人々の間でも、水面下に隠れていた植民地であることへの反発が一気に表面した。

ある日、極右政党が植民地議会の第一党となり全権委任法が成立。合星国植民地からの脱却と主権回復のため、シリウス独立戦争の始まりを宣言した。

後世の歴史家は一連の流れの裏には中央連邦の陰謀があった可能性が高いと指摘している。

短期間で作り上げられたシリウス宇宙軍など、外部からの支援があったことは確実である。また、独立軍の使用していた宇宙用戦闘機が連邦のサラマンダーに酷似していたことが証拠としてよく挙げられている。

合星国政府は他の植民地星系に飛び火するのを恐れ、武力による即時鎮圧を決定。自由と民主主義のために、ひいてはシリウス星系の住民を解放するという名目で軍の派遣を議会に提出。

提出されたその日のうちに承認され、軍の派遣が決定された。

銀河連盟は停戦と交渉による解決を総会に提出。参加国の７０％以上の賛成を得たが、理事国である合星国が反対したため否決された。

結局、赤十字活動の尊重や、民間人への攻撃禁止、大気圏内での核の使用禁止などを定めた戦時条約の締結が限界だった。

火の玉（ファイヤーボール）　2

ルウム海、第七艦隊基地とシリウス星系の中間に、この宙域はある。

かつて、人類とロボットの艦隊が初めて戦い、人類が大敗した不吉な海である。まだそのときの残骸が漂っており、見通しの悪い危険宙域としても知られている。

シリウス星系解放のため、基地を出た第七艦隊はこの宙域にいた。

第七艦隊旗艦　空母ヨブ・トリューニヒト

艦隊司令のティアンム中将と参謀のワッケイン大佐が話し合っている。

「提督、本当によろしいのですか？」

「是非もなし。背広組の命令だ。」

今回の作戦は防衛でも侵略でもなく、「解放」を名目としている。そのため、一般市民への被害は最小限にとどめることが求められた。

しかし、世論が反戦に傾くのを警戒した政府首脳は早期決着も要

求。よって、索敵を伴う通常の進軍ではなく、「誘き寄せ」による敵軍撃破を国防省は命令。この数の利が生かしにくい宙域での停船を、彼らは命令された。

「確かに、もしも私が敵の立場だったら、こんなチャンスは見逃しませんね。」

「私も同意見だ、参謀。明らかに我々は不利な状態にある。」

多くのデブリが漂うこの宙域では、レーダーは役に立たない。場合によっては目視すら困難とも言われる。数で劣るシリウス軍が奇襲するのにうってつけの場所である。

「しかも、我々の居場所を敵にリークしたらしい。」

「何も無いまま作戦の変更を待つわけにはいかない、と言うことですか。」

「上の奴らは現場の苦労など何も分かっておらん。」

「提督、ブリッジからの連絡です。偵察機が怪しい影を見つけたそうです。」

「来たか・・・。」

ブリッジ

「艦長、状況は?」

「敵が何らかの作戦行動をしているのは間違いないようです。しかし、詳細は不明でｓ

「偵察機からの報告！９時の方向に敵艦隊発見。距離３００００」

・・・だそうです。」

「遠いな。参謀、君の意見は。」

「奇襲をかけるつもりではないようです。何か策が有るのだと思われます。」

いくら見通しが悪いと言っても、艦隊規模のものは見つかりやすい。奇襲に出るのなら、小型艦を分散させるのがセオリーであった。

「提督、敵の意図は不明ですが艦隊を二手に分けてはいかがでしょう。」

参謀のワッケインは挟み撃ちを提案した。シリウス政府が宇宙軍をある程度持っていたとしても、たかが知れている。情報部からの情報よると、敵は第七艦隊の四分の一程度の艦隊しかないとのことだった。

「うむ、全艦第一戦闘配備。二手に分かれ、敵を挟み撃ちにする。」

火の玉（ファイヤーボール）　3

シリウス軍旗艦　戦艦ウォルター・アイランズ

巨大商船として建造中であったこの艦は、中央連邦からの技術供与で完成した。しかし合星国の戦艦と比べると見劣りし、他の艦も軍艦というより、武装商船と言うべきものが多かった。

艦隊司令室

「提督！こちらの存在が敵に知られた様です。」

「作業はどこまで済んでいる。」

「現在、７０％ほどが完成済みです。作業完了まで、あと２時間はいるそうです。」

物量・質、両方で劣っている彼らに、まともに戦って勝てる可能性は無い。それどころか、地の利を生かした奇襲作戦でも勝利は危うかった。

「連邦が艦隊を出してくれれば良かったんですけどね。」

「さすがに合星国と全面戦争になる様な危険は犯せないだろう。」

リークされた情報から、第七艦隊の居場所を知った彼らは疑った。あまりに都合の良すぎる情報に、罠かと思ったからだ。しかし、引き分けに持ち込むのも難しい今の段階では、このチャンスにかけるしかないのも事実だった。

彼らは、起死回生の策を持って戦いに挑んだのだった。

第七艦隊旗艦　空母ヨブ・トリューニヒト

フライトデッキ

「隊長、出撃はまだですかね？」

ミッキー・サイモン、裕福な家庭に生まれ、国の士官学校に入学。優秀な成績で卒業の後、宇宙軍に配属される。しかし、そこで見た戦闘機に心を奪われ、三日で転属。転属先で才能を開花させ、先月ついにバイイパー乗りに選ばれた。

このときの彼は、シリウス解放という大義名分を信じ、祖国に誇りを持つ兵士だった。

「慌てるな、じきにお呼びがかかる。」

ミッキーにとってこの隊長は尊敬に値する人物だった。いや、彼だけではない。大戦期、合星国の撃墜王だったこの人は、合星国宇宙軍パイロット全員の敬意を集めていた。

ブリッジ

「戦艦エドウィン・フィッシャーから連絡！突如、氷塊の雨にさらされて被害多数！作戦継続は難しいそうです！」

戦艦エドウィン・フィッシャー、二手に分かれた第七艦隊の半分

を指揮する艦である。艦隊副司令のエルラン准将が指揮していた。

「なんだと！」

「ヤン戦法ですね。」

ヤン戦法、大戦中期に活躍したヤン提督が初めて使った戦法である。氷の固まりを光速近くまで加速させ、質量を増しながら目的に衝突させるという戦法である。

当時、ロボットのマザーコンピューターがあると思われていた星を攻略する際に使われ、衛星軌道防衛システムを粉砕した。その後、降下部隊が無事にマザーコンピューターを破壊。人間対ロボットの戦いは、人間の勝利が決定的となった。

「そんな古典的戦法を食らうとは、ふがいない。」

「しかし、これで我々の勝利はほぼ決まりましたね。」

ヤン戦法は威力こそ高いものの、今ではあまり使われない。散開と迎撃による回避手順が確立されてしまったからである。また、一度しか使えないため、回避されたらそこまでであった。

「１２時の方向、敵艦隊発見！距離３００！」

「よし、攻撃部隊発進。早急にけりをつけて味方の救援に行くぞ。」

火の玉（ファイヤーボール）　４

シリウス軍旗艦　戦艦ウォルター・アイランズ

艦隊司令室

「９時の方向に敵艦隊！攻撃機の出撃を確認しました」

「なんだと！先ほどまでのは陽動か？！」

シリウス軍は準備が不完全だったが、ヤン戦法を実行に移した。手遅れになるよりは、不完全でも良いから攻撃を成功させることを選んだのだ。

攻撃後、敵の行動が停止したことを確認した司令室では安堵の空気が流れていた。しかし、敵の別艦隊発見の報告により全員に戦慄が走った。

「いえ、敵艦隊の規模から考えるに、二手に分かれ挟み撃ちを狙っていた様です。」

「残りの氷塊はどうなっている？」

「幸運にも作業はほとんど終了済み、１０分以内に攻撃できるそうです。」

「ならば後退しながら攻撃準備、できるだけ時間を稼ぐ。」

第七艦隊旗艦　空母ヨブ・トリューニヒト

フライトデッキ

出撃準備を終えたビックバイパーＴ２００がカタパルトで打ち出されようとしている。自分たちに絶対の自信を持っているはずのパイロット達も、このときばかりは緊張に包まれている。

「エルランの禿げ親父の方は被害甚大だって？」

「上官侮辱罪だぞミッキー。」

「俺たち生きて帰れるのかな・・・。」

選び抜かれたパイロットたちも、予想外の味方の被害に動揺を隠せないようである。しかし、彼らの隊長は違った。

「ウルフ１から各員へ、敵は質、量共に我々より劣っている。しかし、敵には策があるようだ。不審なものを見つけた場合は、各自の判断で攻撃せよ。」

「ウルフ２、了解。」

「ウルフ３、了解。」

「ウルフ４、了解！腕が鳴るぜ！」

「威勢がいいなミッキー。やる気があるのは結構だが、熱くなりすぎるなよ。」

今回、上からの命令により、第七艦隊に配属されているビックバイパーは8機である。シリウス軍の戦力が少なく、ビックバイパーの運用は他の戦闘機より手間とコストがかかるとして、通常の半分しか配備されなかった。

空母ヨブ・トリューニヒトには半数の4機が配属されており、二手に分かれた残りの半分は敵の攻撃で空母ごと行動不能である。

戦力が半減しているとはいえ、戦闘は一方的であった。今だシリウス軍の2倍近い数と優れた装備を持つ第七艦隊は優勢で戦いを進めていた。シリウス軍の艦艇は次々落とされ、勝敗は時間の問題と思われた。

「こりゃ楽勝だな。」

「最後まで気を抜くなウルフ4。」

「そうは言いましても隊長、これじゃあ・・ん?」

一瞬、爆発の閃光ではない光が見えた。まるで、氷が光ったような・・・。ミッキーは機体の向きを変え、エンジン全開で飛び始めた。

(ミッキーのやつどこへ行く?何か見つけたのか?)

隊長はミッキーに期待していた。彼の親友、自分を庇って死んだ親友に似ているせいかもしれない。若いし言動に問題はあるが、腕

は確かだし戦局を見極める広い視野も持っている。

年の所為かそろそろ限界を感じていた彼は、ミッキーを次の隊長に推薦することを考えていた。

第七艦隊旗艦　空母ヨブ・トリューニヒト

ブリッジ

「敵艦隊の斜め後ろに高速で動く物体！こちらへと向かっています！」

「なんだと！？全艦緊急回避！可能な限り迎撃も行え！」

古典的とも言えるヤン戦法が成功した理由。それは中央連邦がシリウスに与えた新技術であった。氷塊に特殊なコーティングを施すことでレーダーに探知され難くすることに成功した。当然全く見えなくなる訳ではないが、「ステルス氷塊」と呼べるくらいには見えなくなった。

さらに、シリウス軍は氷塊のサイズを小さくし、ルウムに漂うスペースデブリに紛れさせることで最初の攻撃に成功したのである。また今度は自分たちの艦隊で氷塊を隠し、形勢逆転の一撃を放った。

「そこか！・・っち！外した！」

レーダーが効きにくく、その上高速で動く氷塊にミサイルは当たらない。ミッキーは予測射撃だけで氷塊を破壊していたがなかなか

当たらなかった。氷塊はさらにスピードを増しながら艦隊に近づいていく。

ついに艦隊の一部に被害が出始めた。撃沈するほどの被害は無いが、戦闘継続は難しい。空母ヨブ・トリューニヒトにも氷塊が当たろうとしていた。

「フルコナミコマンド発動！」

（集中だ・・集中しろミッキー・サイモン・・）

全神経を集中させる。

（そこだ！）

「行け！！！」

5本の青い光が氷塊を打ち砕く。空母ヨブ・トリューニヒトは無事であった。その他の多くの艦隊もミッキーのおかげで被害を逃れた。

戦闘は第七艦隊の勝利で終わり、補給を受けた第七艦隊はシリウス星系に向けて進軍を再開。宇宙空間からの攻撃にシリウス軍はなす術も無く完敗。

ほどなくして合星国大統領が紛争終結が宣言、地上での残党軍との戦闘が第七艦隊新たな任務となった。

ミッキー・サイモンはルウム海の戦いで多くの味方艦艇を救った功績により、銀星章（シルバースター）を授与された。

火の玉（ファイヤーボール）　5

紛争終結から1年後、シリウス星系は今だ混乱していた。各地でレジスタンスや残党軍による攻撃が行われ、合星国地上軍は先の見えない戦いに疲れていた。

残党軍やレジスタンスは合星国の後ろ盾によってできた現政府を否定。中央連邦から武器などの支援を受け、独立を手に入れるまで戦い続けることを決めていた。

残党軍鎮圧のために各地で行われた軍事活動で多くの民間人が死傷。人々の反合星国感情は紛争前よりも高まっているといっても過言ではなく、そうした人々の感情が現在の状況を作る最大の原因であった。

第七艦隊旗艦　空母ヨブ・トリューニヒト

パイロット休憩室

ビックバイパー乗りのパイロットたちは、連日の出撃に疲れていた。彼らは選び抜かれたパイロットだ、普通なら毎日出撃した程度では弱音を吐かない。しかし、最近の爆撃、特にふつうの村などを爆撃することは彼らの心に重くのしかかっていた。

「なあ、ミッキー・・・。今日ので何回目の出撃だっけ？」

「忘れた・・。数えたくもない・・・。」

日頃威勢のいいミッキーも口調に元気が無い。

「知ってるか？エルラン准将が昇進したってよ。」

「あの禿げ親父が？なんでまた。」

「残党軍鎮圧に功績があったんだとさ。」

「どうせ民間人の死体を残党軍扱いして稼いだんだろ。」

エルラン准将、今は少将だが、かれはルウム海の戦闘で第七艦隊に大きな被害を出したため、退役処分にされる予定だった。

しかし、上層部は彼を残党軍鎮圧の責任者に任命。ルウム海での進軍停止を命令し、敵に攻撃のチャンスを与えた自分たちに矛先が来ることを防ぐためである。さらに、エルランに汚名返上の機会を与えることで自分たちの寛容さをアピールした。

ミッキーに与えられた勲章も「英雄」を作り上げ、自分たちの失策からマスコミの目を逸らすことが主な目的であった。

「なかなか興味深い話だな、エースパイロットの諸君。」

「げ、エルラン准将。」

噂をすれば影、そのエルラン少将がミッキーたちの前に現れた。

「馬鹿！少将だ！何の御用でしょうか少将閣下！」

エルランの肩には少将を表す階級章がついていた。

「今日は諸君に素晴らしい作戦を持ってきてやったぞ。」

「きっとろくでもない作戦だぜ。」

「勲章をもらったからと言って調子に乗るなよサイモン中尉。すぐにブリーフィングルームに集合しろ！」

ブリーフィングルーム

結論から言うと、それは作戦と言えるほど上等なものではなかった。

ルーメンに核を落とす。一言で言えばそれだけの作戦だった。

ルーメン、人口２０万ほどの都市である。反合星国活動が最も盛んな地域の中心都市であり、ここを通って中央連邦からの兵器が流れ込んでいると考えられていた。

活動拠点の破壊、武器流入の阻止、そして見せしめ。終わりの見えない戦いを終わらせるべく、上層部はこの非常識な作戦を実行に移した。

「ふざけるな！」

「落ち着けミッキー！」

「俺たちに大量殺戮をやれっていうのか！！」

「座れミッキー、平静を乱すな。」

隊長から声をかけられ、ようやくミッキーは落ち着いた。しかし、その顔は怒りに燃えている。

明らかに罠であった。この作戦は隠しきれるものではない。マスコミに知られれば軍は非難にさらされる。そのとき、作戦を実行したパイロットの独断専行として、全責任を負わせて始末するつもりだった。

「血の気が余っているようだな「英雄殿」この作戦は君に実行してもらおう。」

「俺が本気でこんな作戦を引き受けると思ってるのか?」

「君の家族は貿易商を営んでいるのだったな。」

「テメェ、俺を脅すつもりか?」

「幸せな家族が事故で失われる。珍しいことじゃない。」

「・・・・・。」

「分かったようだな、それでは解散。作戦開始は1時間後だ。」

フライトデッキ

核爆弾が搭載されたビックバイパーをミッキーは見つめている。隊長が彼に近づいた。

「出撃しなくていいぞミッキー」

「隊長・・。」

「俺が出撃しない様、全員に命令した。上にはそう報告しておく。」

「それでは隊長が・・・。」

「どうせもうじき引退だ、最後の仕事としては悪くない。」

（いくら隊長が庇っても、誰かがやることになる。）

一時間後、ミッキーは出撃した。

火の玉（ファイヤーボール）　6

ミッキーは長距離ワープ用バックパックを装備して出撃した。大量殺戮の汚名を自分や家族が受けるのは苦しいが、他の人間に代わりをさせる訳にも行かなかった。核を投下した後は、どこか遠くへ逃げるつもりだった。

まっすぐにルーメンへは行かない。自分の存在を知られないため、レーダー網の穴を通るように迂回ルートを飛んでいた。その間、どこへ逃げるのかを考えていた。

「どこに行くかな、エーメンタールかアクシズか、いっそのことハイネセンにでも行くかな。」

「どこにも行かなくていい。」

「その声！隊長！？」

パイロットの勘というものだろうか、彼は出撃したミッキーが迂回するルートを選ぶこと読んでいた。そして、自分は最短距離を通って追いついたのだった。

「引き返せミッキー。これは命令だ。」

「誰かがやらされるんだ、だったら自分がやります。」

「ならばお前を落としてでも止めるまでだ。いくぞ！」

隊長の乗っている機体はビックバイパーＴ３００、一ヶ月前に送

られてきた最新鋭戦闘機だ。その性能はミッキーの乗っているＴ１００より攻撃力、機動性両方で上回っている。

しかも、核兵器やバックパックなどを装備したミッキーは機体を軽くするためにオプションを積んでいなかった。

ルーメンから２００キロほど離れた場所、空と宇宙の狭間と言うべき場所で２機の戦闘機が戦っていた。互いに己を限界まで追い込み、持てる空戦技術のすべてを使って戦う。

永遠に続くかのように思われた戦いは、ほんの数分で決着がついた。ミッキーが隊長の後ろを取り、彼の機体をロックオンした。

「オレの勝ちだ、隊長。」

「さすがだな、俺が見込んだだけのことはある。」

「隊長、なぜオプションを使わなかったんです。そしたらオレは・・。」

「お前とは、一度本気で勝負したかった。完全に互角の条件とは行かなかったが・・。」

「隊長・・・。」

「ミッキー、これを受け取れ。」

隊長から送られてきたのはエリア８８８までのワープ座標と、傭兵志願書だった。

「昔の知り合いに、話をしといた。お前だったら生き延びられる。」

「隊長・・・、ありがとうございます。」

ルーメンは核の炎に包まれた。

これを機に、シリウス星系の混乱は収束に向かう。人々は合星国の本気に恐怖した。

その後、軍上層部は「予定どおり」エルラン少将を今回の出来事の犯人として処刑。実行したパロットについては、「自殺した」とのみ発表された。

だが、その日を境に居なくなったパイロットがいることから、彼が実行犯ではないかとの噂がパイロットたちの間で広まった。

エリア８８８

パイロット休憩室

ミッキーが８８８に来てから、３ヶ月近くが経った。今日はシンとミッキーが奇襲に対する当直のため、ここで待機していた。

「なあシン、どうして俺が８８８に来たのか聞かないのか？」

「・・・他人の事情に興味は無い。」

「お前は相変わらずだな、だが他の連中も聞きにこないな？」

ミッキーは勲章を受けたパイロットである。そのため、名前がメディアに乗ったこともあり、それなりに知れられている。そしてミッキーがここに来た時期を考えると、なぜ来たのかは推測できる。しかし、誰もミッキーを非難するどころか、質問する者すら居ない。

「ここに来る連中らは皆訳ありだ。他人をどうこう言えるほど潔白な奴など居ない。」

「なるほど、じゃあお前はどうなんだ？」

「・・・・・」

「だんまりか、まぁ沈黙もまた解答さ。」

今日もミッキーは火の玉（ファイヤーボール）が書かれた機体に乗る。

そのエンブレムは、自分がしたことを忘れないための戒めであった。

忍者　1

エリア８８８は激戦区である。「地獄の一丁目」の名前のとおり、たいていの人間は一週間で落とされる。ここで一月生き延びられれば、どこへ行ってもエースになれる。そう言われるのも当然だった。

こんなところに来る奴はほとんどが訳ありである。前科者、逃亡者・・・誰もが何らかの事情を抱えていた。

しかし、そんな中にも例外はいる。「金を稼ぎに」そんな普通？の理由で戦う者も居るのである。

ユフィ・キサラギ、５人姉弟の長女である彼女は、ここへ金を稼ぎにきた。

しかし、彼女は家が貧しいから来た訳ではない。仕送りはしているが、それがなくても彼女の家族は経済的に困らない。

彼女の両親は大戦期にエースパイロットとして名を馳せたことのあるパイロットで、今でも指導教官として夫婦揃って飛んでいる。そのため、彼らの家族は「裕福」とまでは言えなくとも、普通に生活していた。

何のためにお金が必要なのか、それは彼女しか知らない。

彼女がこんなところに来るのを両親は止めなっかた。

「「まあ、いいんじゃない。」」

夫婦揃って答えたのだから、放任主義というより無責任ともいえる両親である。

むしろ、彼女の兄や妹たちの方が強く反対した。けど、日頃から自由気ままに振る舞う長女は、行くと言ったら勝手に行くだろうと全員考えていた。結局、自分のパイロットとしての才能を信じる彼女は中学校を卒業すると同時に入隊した。

彼女の飛行経験は長い。何しろ、６歳の時には戦闘機に乗っていたというから筋金入りである。

この時代の戦闘機は操縦者の体格を問わない。サングラス型のＨＭＤと２本の操縦桿、それで機体を操る。その他のコントロールはすべて音声入力だった。

さらに、少年兵もそれほど珍しくなかった。ミノフスキー粒子が実戦に投入される以前、無線操縦戦闘機は軍の主力であり、そのパイロットの多くは子供たちであった。

大人よりも適用が早く、経済に与える影響も少ない。そんなことで昔はほとんどの戦闘員が子供だったときもあった。

ミノフスキー粒子が実用化されてから、無線操縦戦闘機は廃れていき、少年兵もあまり見なくなっていった。しかし、一部の地域や軍では未だ少年兵が主力であることもある。そのため、基地に子供がいてもあまり不自然ではなかった。

むしろ、そんな子供を乗せた両親の方が信じられない。その後も、しばしば両親の仕事場に着いていっては、彼女は戦闘機を乗り回していた。

ユフィには才能があったらしく、めきめきと腕を上げていった。そして、１２歳の頃には基地の中でも両親に次いで３番目の腕前を持つほどになった。さらに、母親譲りの整った顔のおかげで、基地の中ではマスコット的扱いでもあった。

だが、受け継がれなかったものもある。あまりにも胸が無いのでアイドルにはなれなかった。基地の男どもは皆、巨乳主義者であり、女としての人気はユフィの母がダントツ一位であった。そのためユフィに取って貧乳は禁句である。

忍者　2

エリア８８８　食堂

「シンさ～ん、お腹すいたよ～。」

「・・・さっきヤキソバ３人前食べてなかったか？」

先ほども言ったように、彼女には胸が無い。そのため、ＳＥＸアピールという点では絶望的だが、その代わりいくら食べても太らない。その点で、彼女は同性の羨望を受けていた。

食事を終えたミッキーが二人のところへやってきた。

「お前いっつも腹空かしてるよな～。」

「いいじゃん、育ち盛りなんだよ。」

「いや、その胸はもう絶望的だな。」

「うるさい金髪リーゼント！それより、ちゃんと私のことは先輩と呼びなさい！」

確かに、エリア８８８に来たのはユフィの方がミッキーよりも早い。たった１週間だが・・・。

「落ち着けユフィ・・、クリームパフェでいいのか？」

「さすがシンさん！分かってる～。」

ユフィはシンに懐いている。８８８に来た直後、被弾してその修理費でユフィの財布が空になった。そのとき、空腹でうなっていた彼女に食事を奢ってくれたのがシンだった。

なお、他人に興味を示さないシンが少女に食事を奢ったとして、しばらく「シン＝ロリコン」説が基地内に流れた。シンがユフィに声をかけた理由、それは彼一人しか知らない。

「イヤー食べた食べた。シンさん！ありがと～。」

「「・・・・」」

シンとミッキーは驚いていた。起こったことをありのままに話すと、たった３分前までユフィの前にあった高さ３０ｃｍはあろうかというパフェが既になくなっていた。なのに、彼女のお腹は少しも膨らんでいるようには見えない。二人は目の前で起きたことが信じられなかった。

そのとき、アナウンスが基地中に流れた。

「基地司令のサキだ。パイロットは至急ブリーフィングルームに集合しろ。」

ブリーフィングルーム

シンとミッキーは椅子に座って待っている。

「なあシン今度は一体なんだろうな。」

「さあな・・・。」

ユフィは途中で買ってきたポップコーンを食べている。ミッキーが少しもらおうとしたが手をはたかれた。

「いてぇ！金を払ったのはオレだぞ！」

「私を貧乳呼ばわりした慰謝料だよ。」

サキが入ってくると騒がしかった部屋が静まり返った。ユフィもポップコーンを食べるのを止める。

「諸君、状況を説明する。バイドの群れを偵察機が発見した。」

バイド、生命体とロボットが合体したと言われる兵器である。大戦中期に突如現れ、人類側に多大な被害をもたらした。一般的には、ある国が開発中であった生物兵器をロボットが奪ったことで生まれたとされている。

しかし、真相は不明である。中には数百年未来の人類が作り出した兵器であり、制御出来なくなったため、この時代に廃棄されたという説もあった。

「彼らは近くの衛星に巣を作っており、このまま放置すれば奴らの一大拠点になることが懸念される。」

ヤン提督によるマザーコンピューター破壊の結果、ロボットは銀河規模での組織的な行動が行えなくなった。そのため、今では残党

軍と中規模の移動式生産施設が各地にいるだけだが、バイドは少し違う。

彼らは惑星や衛星に巣を作り、そこを拠点にして侵攻する。拠点同士での連携は無く、拠点ごとに勝手に行動する。マザーコンピューター破壊以前もこうした行動を取っていたことがバイドとロボットの関係性を否定する一因となっている。

「昨日、国連の委員会が対消滅兵器の使用を許可した。本基地はバイド拠点の攻撃の支援を行う。」

「支援？俺たちに何をさせるつもりなんだサキ？」

基地司令のサキを「司令」と呼ぶものはあまり居ないし、サキ自身もそれを強制しない。彼に敬語で話すのは正規兵や秘書官くらいである。だが、サキの命令には全員が従う。

サキ・ヴァシュタール、階級では従えられない者たちを従える男である。

「対消滅兵器による攻撃は国連の特殊攻撃機部隊が行う。我々はその支援、要するに露払いだ。」

「結局、いつもと同じってことだね。」

「その通りだユフィ。作戦は3時間後、全員出撃準備をしておけ。」

忍者　3

バイド拠点衛星近くの宙域

「こちらシン。目標の衛星をレーダーが捉えた。サキ、攻撃部隊はいつ来る予定なんだ。」

「後２時間後に到着の予定だ。それまでに対空能力のあるバイドを片付けろ。」

「私たちなら楽勝、楽勝♪」

ユフィの乗るラファールは８８８では少し古い方に入る小型戦闘機である。しかし、その機動性は未だにトップクラスであり、本当はレース用に開発されたのではないかという噂があるほどである。

彼女はその腕前と、機体に書かれたピンク色の手裏剣のエンブレムから「忍者」とも呼ばれている。ちなみに、彼女を最初に忍者のようだと言ったのはシンである。

「ふふ、秘技木の葉落とし～。」

ユフィは、まるで木の葉が舞うようにバイドの間を飛び、敵機落としていった。しかし、木の葉落としと言っているが、大空のサムライのアレとは関係ない。

２時間後、ほとんどのバイドは落とされていた。その時、攻撃部隊からの通信が届いた。

「こちら国連の特殊攻撃部隊マザーグース1。エリア888の諸君、バイドは片付いているか？」

「ああ、いつ来ても大丈夫だ。」

「それは良かった。何しろ、こっちはほぼ丸腰だから、うわぁ！」

「どうしたマザーグース1、何があった。」

「こちらマザーグース1！今バイドの攻撃を受けている！助けてくれ。」

運が悪かったとしか言いようが無かった。たまたま周辺宙域の偵察に出ていたバイドがまだ残っており、攻撃部隊と遭遇してしまったのだ。

「私にお任せ！」

ユフィはエンジンス全開で駆けつけた。攻撃機が3体のバイドに襲われている。ユフィはすれ違い様に一体を撃墜、急速旋回の後もう一体を落とした。だが残りの一体がユフィの後ろについてた。

「げ、後ろに付かれた！」

「ユフィ、援護する。」

遅れて到着したシンがユフィの後ろに付いていた最後の一体を落とした。

「周辺に敵影なし。マザーグース1、大丈夫か？」

「こちらに被害は無い。君たちには感謝する。」

攻撃機から放たれて対消滅ミサイルがバイドの拠点衛星に向かって飛んでいく。数秒後、宇宙に大きな花火があがった。対消滅兵器、惑星さえも消し飛ばしかねない危険な兵器である。

星を手に入れたいのであって、消し飛ばしたいのではない各国はいたずらに対消滅兵器が使用されることを懸念。そのため、国際銀河連盟のみが使用・管理することが出来るとされた。今では、こうしたバイドやロボットの拠点攻撃にのみ使われている。

エリア８８８食堂

帰ってきたユフィ達が食事にやってきた。しかし、バイドという生体兵器と戦った後は皆食欲がわかない。砕け散ったバイドの残骸を思い出すと、飲み込むどころか吐き出しそうになる。しかし、そんな中にも例外はいる。

「あ～お腹すいた。おばちゃん炒飯大盛りね♪」

「酢豚と青椒肉絲を追加ね♪」

「今度は天丼とかに玉もお願いね～。」

ユフィ・キサラギ、底なしの胃袋を持つ少女である。もしかしたら、彼女がここへ来たのは、食費を稼いでお腹いっぱい食べるためかもしれない。

野獣　1

大戦終結から既に15年が経った。しかし、銀河の各地では小さな戦火がくすぶり続けている。

正規パイロットを育成するだけの余裕が無いところでは、傭兵を主な戦力としている。

しかし、一度契約が終われば、条件次第で敵にも味方にもなる傭兵を忌み嫌う者もいる。

その中でも特に嫌われるのが、『裏切り者』である。

契約の途中で寝返ったり、逃亡した裏切り者の存在は傭兵の信用に関わる。そのため、裏切り者の大半は傭兵達自身によって始末されることが多い。

傭兵の多くは「大金がいる。」「やむを得ず。」等の理由があり、仕方がなく傭兵家業をやっている者が多い。

彼らは平和な生活に憧れ、それを手にするために日夜戦っている。そんな中で、『戦うために戦う』者は異質な存在である。

戦場に戻ってしまう彼らの多くは一度戦場から離れても、平和に馴染めず、戦場に戻ってきてしまった者達である。

彼らは死に場所を探すかのように戦場を渡り歩く。

彼らにとって、戦場だけが生きていること実感できる場所であり、死だけが安息を得る方法である。

しかし、ヤザン・ゲーブルはそうした者達とは違い、純粋に戦闘が好きで戦っている。彼に戦う理由を聞くとこう答えるだろう。

「趣味だ。」

趣味で戦う彼だが、その実力は非常に高い。エリア８８８で一番稼いでいるのはシンだが、一番強いのはヤザンだと言われている。

彼は多くの戦場を渡り歩き、どんな死地でもしぶとく生き抜いてきた。

エリア８８８　シミュレーションルーム

半世紀近くにわたるロボットとの戦争の結果、戦闘機の操縦系統は規格化が進んでいる。

そのため、一度訓練を受けたら大抵の戦闘機は同じような感覚で操れる。よって、戦闘訓練で実際に飛ぶことは無く、ほとんどシミュレーションで済ませることが出来るようになった。

ただ今、新人のルーク・スカイウォーカーがヤザンと訓練中である。

「うわ！、ととと、そりゃ！」

「甘い！」

ルークの機体にヤザンの攻撃が当たり、ルークは撃墜された。

「あ～、これで１３連敗か～。」

画面にはこれまでの結果などが表示され、ルークはヤザンに１３戦０勝１３敗していることが表示された。

「俺から一本取るになんて１０年早い。このくらいで止めて飯にするか、奢ってやるよ。」

「ゴチになります！」

野獣　2

エリア８８８食堂

ヤザンがチキンカレーを食べている。ルークはふと考えた。

（そう言えば、ヤザンさんがカレー以外のものを食べてるとこを見たことが無い？）

強さの秘訣はカレーにあるのだろうか？

ルークはスパゲッティーを食べながら、そんなことを考えていた。

そこに食欲大魔王のユフィとミッキーがやって来た。

「あ～お腹すいた。ごはん♪、ごはん～♪」

「お前、本当に良く食うな。」

ユフィーにミッキーの声は届いていない。何を食べようか、ものすごく集中して考えている。

もしかしたら、戦闘中よりも真剣かもしれない。

「よし、月見そば！君に決めた！」

どうやら決まったようである。

ちょうど昼時で食堂内は混んでいたので、二人はヤザンとルークの隣に座った。

「ふふふ、この香り、この暖かさ、これぞ月見そばよ。」

「ヤザン、隣、座るぜ。」

だが、ユフィはそばに夢中で、二人に気づいていないようである。ミッキーはルークに話しかけた。

「なあルーク、ユフィの奴近頃ソバばっかり食ってないか？」

「そういえば確かに。」

カレーを食べ終え、コーヒーを飲んでいたヤザンが二人の疑問に答えた。

「少し前、珍しくシンの奴がレーション以外のものを食べていたんで、試してみたら美味かったそうだ。」

レーション、素早く摂取でき、栄養バランスも優れ、そのうえ安い。

そんな三拍子揃った「ある意味」究極の食べ物だが、味は悪い。

シンは基本的にレーションしか食べない。一日二回、まずいレーションをコーヒーで押し流す。

それが彼の基本的な食事であった。

そんなシンでもたまに蕎麦やカップヌードルを食べていることがある。

もしかしたら、故郷を思い出しているのかもしれない。

「あれってお腹はいっぱいになるけど味がね～。」

あっという間にそばを食べ終わったユフィがレーションの文句を

言う。
食欲大魔神の彼女でも、レーションは食べたくないようだ。
４人がそんなことを喋っていると、シンがコーヒーとレーションを持ってやって来た。
空席を探している彼にユフィが手を振る。。
「シンさーん、こっちこっち。」
ユフィの隣に座ったシンはレーションをコーヒーで流し込む。
明らかに、食事を楽しんでいるようには見えない。
「シンさん、もっとレーション以外の食べ物も食べなきゃ。」
「そうですよ、レーションばっかりでは体を壊しますよ。」
ユフィとルークがそう言って、シンに食生活の改善を喚起する。
「・・・栄養的には、レーションと水だけで問題ない。」
レーションを流し込み終わったシンはコーヒーを飲みながら答えた。そんなシンにヤザンが言う。
「なあシン、俺とまた勝負しないか」
実はヤザンとシンは一度戦ったことがある。

野獣　3

銀河国際連盟は銀河の平和の維持を目的として創設された。
また、ロボットの反乱や外宇宙からの侵略など、人類の存亡の際には連合軍を組織することも予定されている。

しかし、大国達の主導によって作られたため、その活動には限界がある。
合星国のシリウス星系鎮圧の際にも、声明を発表するだけで具体的な行動はとれなかった。

こうした、大国の問題には関与せず、中小国の問題にのみ介入する国連に反感を覚える者も少なくない。

かつて、ヤザンが所属していたタイタンズもそうした反国連勢力の一つであった。

セ・リーグ星系にはイデオロギーや人種の異なる６つの勢力が存在し、長い内乱が起こっていた。
タイタンズはその中でも豊富な資源を背景に、最大戦力を誇っていたが極端な選民主義のため孤立していた。
内乱の末、国連の支援を受けたプーカ民主政府が主導となり、ついに他の４つの勢力との平和的同盟を作り上げた。

しかし、タイタンズは最後まで和平を拒否。
自分たちがセ・リーグ星系の支配者であることを主張し続け、かつて無い大規模な進軍を開始した。
タイタンズ軍は連戦連勝、セ・リーグ星系のほとんどを占領するにいたった。

しかし、そうした中でタイタンズ政府による他勢力への迫害や虐殺が各国のマスコミによって報道される。
さらに合星国から来たジャーナリストをスパイ容疑で殺害するなど国際社会内での孤立を深めていった。
合星国は国連軍の派遣を国連総会に提案。合星国と対立する中央連邦も賛成したため短期間で可決され、合星国を中心とした国連軍が派遣された。

戦線が延びきっていたタイタンズ軍は、戦力差がひっくり返ったことで各地で敗北。苦しい撤退戦を強いられていた。

軍上層部にとって、傭兵とは捨て駒と同意義である。
時には彼らが軍の主力になるため、日頃そうした態度は取らない。
しかし、正規軍と比べれば、どちらが重要であるかは明白である。

ヤザンがいる部隊もついに「名誉ある殿」というなの捨て駒にされた。

「ジャマイカンめ、俺達を囮にして自分だけ逃げるつもりだな」

ヤザンは発進間近のコックピット内で呟いた。

現在、傭兵達が乗っている艦、戦艦オットー・ヴェーラーは国連軍に包囲されかけている。
殿として追撃を妨害して来た結果であるが、かなり危険な状況である。

艦長のジャマイカン中佐は自分と艦を守るため、傭兵達に出撃を命令。

国連軍が傭兵達の相手をしている隙に逃げ出すつもりであった。

契約上、傭兵達はジャマイカンの命令には従わなければならない。

かといって、勝手に契約を破棄して逃げ出すことも出来ない。

多く者は覚悟を決めていた。

野獣　4

戦闘が開始された。
戦力比ではかなり不利だが、熟練した傭兵達は国連軍の機体を次々撃墜していく。

「ふはははははは。この緊張感、たまらん。」

ヤザンも次から次へと敵機を落としていく。
味方機を落とされたパイロット達が敵討ちに向かっていく。

「ちくしょう、よくも相棒を！」

「お前もその仲間に入れてやるってんだよっ。」

しかし、誰一人勝つことが出来ず、皆落とされていった。
だが、数で押してくる国連軍はとどまることを知らず、時間が経つにつれて傭兵達は次第に追い込まれていった。

戦艦　オットー・ヴェーラー　ブリッジ

「傭兵どもは何をしているんだ！」

なかなか逃げ出す隙が出来ず、ジャマイカンは焦っていた。
虐殺や拷問などの戦争犯罪に関わっていた彼は、投降しても裁判で重い判決がでるのは明白である。
なんとしても本国まで逃げ延びねばならなかった。

「ちっ、主砲発射用意、目標、敵主力艦。」

「しかし、目標との間には交戦中の友軍が・・・。」

「かまわん、どうせ奴ら（傭兵）とはここまでだ。急げ！」

後退しながら主砲を撃ち、敵の足並みが乱れたところで一気に離脱するつもりだった。

主砲から発射された光線が、敵味方の区別なく飲み込んでいく。捨て駒にするだけでなく、発砲までして来たジャマイカンにヤザンは切れた。

「ジャマイカン！？味方を撃つだと！！」

突然、ヤザンはあえて隙を見せ、敵機を自分の後ろに付かせた。そのまま攻撃を回避しながら飛び続ける。

「よし、いいぞ。そそまま付いてこい。」

ヤザンと敵機はそのままオットー・ヴェーラーの方に近づいていく。

「よし、今だ。」

敵戦艦に近づきすぎたことに気付いた敵機は対空砲の餌食にならないため、そこから離れようとする。

しかし、ヤザンが急に正面に入って来たため、慌てて引き金を引いた。

ヤザンはそれを回避するが、外れたビームライフルはオットー・ヴェーラーのブリッジに吸い込まれていった。

戦艦　オットー・ヴェーラー　ブリッジ

「ヤザンめ何をしている。早く落とさんか！」

なかなか敵の足並みが乱れない上に、敵機が近くにやって来たことで、ジャマイカンはイライラしていた。

「えーい、ヤザンもろとも対空砲で落としてしまえ！」

「敵巡洋艦に主砲命中！敵の足並みが乱れています！」

待ちに待ったオペレーターからの報告に、ジャマイカンは喜んだ。しかし、次の瞬間彼の目に映ったのは迫りくるビームライフルだった。

ビームライフルの直撃を受け、ブリッジは吹き飛んだが誘爆等は起こらず、オット・ヴェーラーはただ沈黙した。

また、勝利したはずの国連軍も巡洋艦をやられたことで陣形が乱れ、一時的に攻撃の手が弱まった。

生き残っていた傭兵達は戦艦が沈んだと考えて、国連軍に投降し始めた。
戦艦が沈んだのなら、作戦は失敗だが契約は終了である。
後は生き残ることが最優先であった。

ヤザンはあらかじめ機体に積んでおいた追加ブースターを点火し、一気に戦場から離れていった。
国連軍なら傭兵といっても不当に扱われる可能性は低いが、何ヶ月も拘束されるのは堪らなかった。

だが、彼は知らなかった。彼が逃亡した方向には、国連の要請で支援に来たエリア８８８の分遣隊がいることを・・・。

国連所属、航空巡洋艦バグダッシュ　、合星国が国連に提供した旧式の巡洋艦を改造し、戦闘機の運用を可能にした艦である。
国連軍事委員会からの指示により、エリア８８８からも数人が支援任務に当たり、この艦で輸送艦の警護等をしていた。

急速に近づく機影をレーダが確認したため、シンが緊急発進の準備に入る。

「こちらシン、発艦準備完了。」

「機影はタイタンズ軍の機体であることが判明しました。投降しないようなら撃墜してください。」

「了解した。他にも出れる奴はいるか。」

「いえ、今出ることが出来るのはあなただけです。ですから慎重に行動してください。」

オペレーターからの指示を受け、シンは発進した。

シンもヤザンもお互いの機影をレーダーで捉えた。

「タイタンズ軍の機体に告ぐ。こちらは国連軍投降しなければ撃墜する。」

ヤザンは素早く考えを巡らせる。

機影は一機しか見えない、他の機体はすぐに出て来れない可能性が高い。

エネルギーの残量は多くはないが、一機を相手にするくらいなら行ける。

だが、こんなところにいるのは後方支援の護衛部隊。

国連から派遣された傭兵である可能性が高く、手強い相手かもしれない。

「まあいい、戦いで確かめるまでだ。」

投降する様子が無いのを見て、シンも戦闘態勢に入る。互いにヘッドオンですれ違い、急速旋回に入る。

（（速い、こいつただ者じゃない！））

互いに相手の動きから相手がかなりの実力者であることを知る。

ヤザンの方がスピードは速いが、シンの機体は小型で回転半径が

小さい。
どちらもなかなか相手に一撃を入れることが出来ず、我慢し合うような戦いが続いていた。
「ちっ、そろそろエネルギーがヤバいな」
先の戦闘で消耗していたヤザンはエネルギーの残量が危なくなっていることを感じ、勝負に出ることにした。
「落ちろ！」
一気に接近して相手が回避行動をとったところで一撃を加える。
これまで多くのエースパイロットを葬って来た技だ。
「そろそろ来るか。」
ヤザンのエネルギーは多くない。
そう予想していたシンはわざと戦闘を長引かせ、ヤザンが多少強引でも勝負に出てくるのを待っていた。
急速に近づいてくるヤザンに、シンは逃げるどころか逆に接近。
すれ違った直後に急速反転して、引き金を引いた。
「なんだと！」
驚いたヤザンは急いで回避行動を取るが、片羽を奪われてしまった。
その後、機体は爆発したがギリギリの所でヤザンは脱出していた。

「パイロットは・・・脱出したのか、あのタイミングで。しぶとい男だ。」

その後、ヤザンはシンによって回収され、国連軍の捕虜となる。

３ヶ月後、タイタンズは降伏。
セ・リーグ星系は国連監督のもとプーカ民主政府によって戦後復興が進められることになった。

国連軍の捕虜になっていたヤザンは国連と契約を結び、エリア８８にやって来た。

野獣　5

エリア８８８食堂

「断る。」

ヤザンの誘いをシンはきっぱりと断った。ヤザンは何度かシンに勝負を挑んでいるが、いつも断られていた。

「相変わらずつれないな。」

シンとの戦いはヤザンの経験してきた戦いの中でも充実したものであった。

だがシンがそれを望まなければ、再びあの興奮を味わうことは出来ない。

５人がそんな雑談をしていると、突如アナウンスが流れた。

「基地司令のサキだ、パイロットは至急ブリーフィングルームに集合しろ。」

エリア８８８　ブリーフィングルーム

いつもの様に、サキが直接作戦を伝える。

「先ほど委員会からテロリスト殲滅の命令が来た。」

「テロリスト？」

全員、ルークと同じような疑問が浮かぶ。
テロリストは本来、国際警察機構の管轄である。
「どちらかと言えば、残党軍だな。『巨人の後継者』という名前だ。」
「『巨人』・・タイタンズ軍か・・・」
「そうだシン。彼らはセ・リーグ星系でクーデターをはかるも失敗、数隻の巡洋艦を奪って逃走した。」
「巡洋艦て、そりゃテロリストの範囲を超えているだろ。」
「だから俺達に回されたんだろ、人間相手は久しぶりだ。」
ミッキーはあきれているが、ヤザンは久々に人間と戦えるのが嬉しそうだ。
「私パス。」
「知っているだろうが作戦拒否は罰金だぞユフィ。」
「え～、生理休みってないの～サキ。」
「例外は認めん。」
「ちぇ。」
（（（それでさっき蕎麦一杯しか食べなかったのか。））））

格納庫

発進を間近に控えたパイロット達が待機している。
ヤザンが緊張しているルークに気付いた。

「どうしたルーク、人間相手は初めてか？」

「は、はい。」

おもむろに、ヤザンはルークの股間を掴む。

「ひゃ！？」

「縮んでるぞ！」

「は、はいぃ。」

「いいか、ビビった奴から死んでいくんだ。いつもの様に飛べ。」

「は、はい。」

戦いのために戦うヤザンは『野獣』の渾名を持つ。
しかし、面倒見がよく、若手パイロットからは頼りにされている。
もしかしたら、自分を倒す者が現れるのを待っているのかもしれない。

クーデターに失敗した『巨人の後継者』達はしばらく海賊でもして、再起の時を待つ予定だった。
しかし、その夢は儚く消え去ろうとしていた。

「４番艦、撃沈！」

「これがエリア８８８か・・。」

３０分前まで艦隊を作っていた艦はもはや１隻のみとなり、他の艦は大きな花火となって散っていった。

「弱い、弱すぎる。」

ヤザンは不満であった。彼の乗るハンブラビは黄色い獅子のマークが書かれており、とても目立つ。
しかし、彼の強さを知った敵のパイロット達は誰も彼に挑もうとしない。
後ろから奇襲をかけようとする者もいたが、ハンブラビの高い索敵能力とヤザンの鋭い勘の前には無意味であった。

最後の艦が沈み、敵機も皆撃墜され『巨人の後継者』は全滅した。
エリア８８８の者達はほとんど損害を出さず帰還した。

「ルーク、生きてるか？」

「はい、大丈夫です。」

ルークの声に緊張が無い、彼が戦士として成長したことを感じヤ

ザンは嬉しく感じた。

若葉マーク

ポリス・マサ、銀河の辺境に存在する小惑星である。
珍しい鉱物などの資源がある訳でもなく、農業に適した豊かな土地がある訳でもない。

この星の最大の産業、それは『傭兵』である。
大戦以前より彼らは戦闘のプロフェッショナルを銀河中に派遣して来た。

老若男女がありとあらゆる戦場に出て行った。
パイロットになる者、整備兵になる者、地上で泥にまみれる者。
いかなる場所でも戦場ならば彼らの姿を見ることが出来る。

彼らにとって戦場は地獄ではない。
むしろチャンスをつかむことの出来る希望の地である。

そんな彼らの中でも『ジェダイ』と呼ばれる者がいる。

幾多の戦場を渡り歩き、目覚ましい活躍をしたもの。
戦場という極限の状況で高潔な精神と、比類なき勇気を見せた者。

『ジェダイ』はそんな者だけに与えられる称号である。
彼らは人々から尊敬を受け、その名は多くの者に語り継がれる。
そして多くの若者が『ジェダイ』になることを目指して、日々戦いに挑むのである。

ルーク・スカイウォーカー、家族に何人ものジェダイがいる名門

スカイウォーカー家の末っ子である。

若葉マーク２

エリア８８８は超巨大空母を改造して作られた基地である。
ロボット軍が建造したこの艦は大戦中期に人類側の手に落ちたが、大きすぎて人間の手で動かすのは困難であった。
そのため兵器としてのロボットが禁じられた今日では人類によって改造され、今では基地として使われている。

戦闘機はもちろん、駆逐艦まで収容可能なこの基地には様々な設備が存在している。
映画館、食堂、ゲームセンター、風俗店、まるで一つの都市とも言える規模である。

そして、毎朝見られるのが走り込む傭兵達である。

傭兵達は毎日のトレーニングを欠かさない。
彼らは剣で切り合うことも無ければ、激しいＧに押しつぶされることもない。
しかし長時間戦い続けることもある彼らにとって体力が無いことは死を意味する。
彼らはその身に少しでも多くの体力を付けるために走り続ける。

そんな中、ルークも走り込んでいた。

「はぁ、はぁ。」

ルークがエリア８８８に来て数ヶ月、彼は成長できない自分に焦っていた。

「はぁ、はぁ。」

彼の祖父や姉達は皆ジェダイとして尊敬されている。自分も速くジェダイに成らなければ。

（絶対に、父さんの様にはならない！）

だが、焦ったところで成長できるものではない。それはルークにも分かっていた。

「よぉルーク。」

「あ、ヤザンさん。おはようございます。」

走るコースが似ているのか、ヤザンとルークはよくランニング中に出会う。

『野獣』の渾名をもつが、ヤザンは若者の面倒見がよく、ルークのことも気にかけていた。

また、ルークもそんなヤザンのことを頼れる先輩として尊敬していた。

「ルーク、焦るなよ。」

ヤザンはルークの焦りに気付いていた。

「焦りは隙を生む、心に余裕を持て。」

「は、はい・・・。」

特にこの数週間、ルークはスランプに陥っていた。

思う様に敵機を撃墜できず、むしろ落とされそうになることもあった。

そんなこんなで彼の稼ぎはサッパリだった。

エリア８８８では食費からミサイル代まですべて自腹である。
ルークは今までにそれなりに稼いでいたので、今すぐ生活に困る
ことは無いが、このままではジリ貧である。
こうした事情も、彼の焦りの一つであった。

若葉マーク3

次の日、戦闘領域

「ハァ、ハァ　・・・」

いつもの様にロボットの残党軍との戦いに出たルークだったが、既にいくつか被弾しており満身創痍であった。

翼に描かれた緑色の葉、彼の故郷で勇気と生命力を象徴する『グリーンフォース』も被弾のこげ後で枯れ葉になっている。

いつもの彼なら始めに被弾した所で基地に帰還するのだが、今回は焦りのあまり戦闘を継続した。

その結果、被弾して性能の下がった機体と焦ったパイロットというコンビはろくな戦果も出せない無いまま、今も敵に後ろから追われている。

「機体の反応が鈍い・・・！」

前方からも敵機が接近し、前後挟み撃ちにあったルークは自分の死を強く感じた

「ここまでなのか・・・、母さん、父さん・・・」

「諦めるのはまだ速いぞ。」

ルークがあきらめかけた時、ヤザンがルークの後ろにいた機体を落とした。

ヤザンはそのまま前方にいた機体も落とし、ルークは九死に一生を得た。

「馬鹿野郎！『最後まであきらめるな』といつも言っただろう。」
「す、すみません・・・。」
「俺が後ろを飛ぶ。退くぞ。」
「はい・・・ありがとうございます。」

涙が出て来た。
成長しない自分、焦るあまり危険に飛び込んでしまった自分。
なにより、死の直前に父親のことを口にした自分。
全てが悔しかった。

戦いの後ルークは基地内の公園で黄昏れていた。
「男には何をやっても駄目な時がある。そんな時は酒でも飲んで寝てしまえ。」
昔、ルークが知り合いの傭兵から言われた言葉である。
酒が飲めない彼は、こうして公園で噴水を眺めながら黄昏れていた。
「ハアーーー」
先ほどから、口を開けばため息ばかり。
自分に傭兵は向いていないのではないか、そんなことを考えていた。
「ルーク。」

「あ、・・・ヤザンさん。」

戦いのために戦う、いわゆる『戦闘狂』と呼ばれる人々にヤザンは分類される。

しかし、面倒見の良さという点で多くの戦闘狂とは大きく異なる。

今もこうして、ルークの様子を見に来た。

「ルーク・・・お前、親父さんのことで悩んでるな。」

「！！？・・別に、あんな臆病者のこと・・・。」

ルークにとって父親は臆病者の象徴だった。

家族を見捨てた男。

父のことを話す時、母はいつも悲しそうだった。

「お前の父親、アナキン・スカイウォーカーは決して臆病者ではない。」

「どういうことです？・・・」

「奴こそ本当の戦士だった・・・。」

若葉マーク４

十数年前

ポリス・マサ、傭兵を主な産業とするこの星を快く思わない国は多い。
かといって、むやみに侵略しようなら被害は計り知れない。
また、こんな時代では彼らの力が必要となることもあった。

しかし、かつて一度だけポリス・マサは侵略を受けたことがある。
相次ぐ植民地星の反乱に苦しんでいた国が反乱軍主力の一翼である傭兵を取り除くため、侵略を開始した。
宇宙にその名を轟かせる傭兵達だが、大国の物量作戦に次第に押されつつあった。

スカイウォーカー家

一人の男が自分の部屋を整理している。
その徹底した掃除はまるで二度と戻ってくる気がないようにも見える。
彼の妻が部屋に入って来た。

「・・・アナキン。」
「パドメか・・・。子供達は？」
「よく寝てるわ」

「そうか・・・じゃ、行ってくるよ。」

ジリ貧の戦況を覆す方法。
それは奇襲、しかも敵大将の首を取るしか無い。
だが、それは生きて戻ることは無い決死の作戦である。

宇宙空母戦闘群　アンクル・トム

短期決戦のつもりで軍を進めていいた大国はポリス・マサの予想以上の対抗に動揺。
作戦は長期化の兆しを見せており、首相は自ら兵士を鼓舞するために前線近くまで来ていた。

彼は自分が攻撃にされされるとは全く考えていなかった。
しかし、決死隊はすぐそこまで来ていた。

「敵の最終防衛ライン突破したようです。隊長！」

「全機、散開！でかい花火をあげろ！！！」

十数名の決死隊は味方の陽動作戦によって出来た隙をついて突入。
既に隊の半数近くが失われていたが、厳重な防衛網を突破したことを考えれば『半数も』残ったというべきであろう。

だが、既に多くの兵装が弾切れとなっており、残った機体も敵旗艦を見つける前に落とされそうだった。

「たいした奴らだ、だがここまでだな。」
「チッ・・・後ろに付かれたか。」

アナキンも後ろに付かれ、既にいくつか被弾していた。
さらに前方からも敵機の編隊が接近していた。
しかし、アナキンは同時に敵旗艦も捕捉していてた。
「そこか！」
機首の向きを変え一気に接近する。
エンジンは悲鳴を上げており、今にも壊れそうである。
被弾した機体が彼の機動に耐えられるか不安だが、アナキンは迷わなかった。
激しい砲火がアナキンの機体に降り注ぐ。
既にエンジンは火を噴いており、脱出装置も機能しないような状態であった。
敵の隊長機と思われる機体がとどめを刺しにくる。
「落ちろカトンボ！」
だがアナキンは自分の勝利を確信した。
「勝ったぞ！」
「なにぃ！」
落とされる直前にアナキンが放ったミサイルは敵艦のエンジンに直撃。
人々が脱出する間もなく、艦は炎に包まれた。

首相暗殺、このあまりに大きすぎる不祥事を軍上層部は徹底的に隠蔽。

首相は事故死したということになった。

ポリス・マサは真相を闇に葬ることと引き換えに和平を締結。

アナキン達の活躍は闇に葬られた。

若葉マーク5

エリア888公園

「そんな・・・」

ルークは自分の父を臆病者だと思っていた。
父は家族を見捨てて自分だけ生き延びるために逃げた。
それがルークの知る公式な記録だった。

「でもどうしてそんなことを知って、いえ・・すみません。」

エリア888には訳ありの者が多い。
そのため、過去を尋ねるのはタブーに近かった。

「お前の父親を落としたのは俺だ。」
「えっ!!!?」

「仇を取りたかったら言え。いつでも相手してやる。」

「・・・」

ヤザンはそう言って去っていった。
ルークはそれを見送ることしか出来なかった。

数週間後

このところ、エリア８８８は休み無く出撃しいた。
一ヶ月前、姉妹基地とも言えるエリア８８７がバイドの奇襲で半壊。
当面、８８８がそのエリアも担当することになった。
ロボットの残党軍やバイドの発見報告が次々行われてくる。
パイッロト達はその対応に追われていた。
司令官のサキはこの事態に対応するためコード3を発令。
パイロットや整備兵達は3グループに分けられ、交代で任務に当たり恒常的な２４時間体制が形成された。
今、ヤザンとルークの所属するグループがバイドと戦っていた。
いつものエリア８８８ならどうということは無い相手である。
しかし機体の数は三分の一、しかもパイロット達は連日の出撃で疲労がたまっていた。
ついにあのヤザンまでもが被弾した。
「うぉ！！」
「ヤザン、大丈夫か？」
「エンジンを片方やられた。いったん帰還する。」
エンジンが片方しか無い機体はただの的である。
無事に帰還するのは至難の業であった。
「だれか護衛できる奴はいないか？」
「僕が行きます。」

「ルークか、頼むぞ。」

ルークはミサイルを打ち切っており、補給の必要性があった。

ルークがヤザンの後ろを飛んでいる。

いつでもヤザンを落とすことが出来る位置である。

しかもミノフスキー濃度が濃く、基地との通信は出来ない。

ここでヤザンが落とされても、バイドにやられたと言えば誰も疑ったりはしないだろう。

「ヤザンさん。」

「なんだ。」

「僕は父みたいになれるでしょうか。」

「無理だな。」

はっきりと告げられルークは沈黙した。

今まで見下していた父親が実はすごいことが分かり、ルークは完全に自信を失っていた。

彼はエリア８８８を去ることを考えていた。

「誰かと同じ様に飛ぶなんて、簡単にできることではない。」

「え？」

「自分の飛び方を見つけろ、そうすればお前はもっと速く飛べる。」

「自分の飛び方・・・。」

ヤザンはルークのスランプの原因を知っている。
ルークは成長しようとしているのだと。

今までの彼の飛び方はまるで教科書であった。
おそらく、同じ傭兵である家族に教わった飛び方なのだろう。

今、ルークは自分の飛び方を見つけようとしている。
それがスランプの原因なのだと。

「他の奴らの飛び方をもっと観察して真似してみろ。その中からお前の飛び方が見えてくるはずだ。」
「は、はい！。」

ルークに取ってヤザンは親の仇であるが、頼りになる教官でもある。
敵討ちなどではなく、いつか正々堂々と勝負を挑む。
ルークは決意した。

ルーク・スカイウォーカー、後に『ジェダイマスター』と呼ばれる伝説の傭兵。
彼の伝説はここから始まったのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5234i/

Area 888

2010年10月9日04時25分発行